

4 学生支援

1. 学生の悩み

お茶大生はどのような悩みや不安を抱えているだろうか。2007年に実施された全国大学生調査コンソーシアム／東京大学大学経営・政策研究センター「全国大学生調査」では、「よくある」あるいは「ときどきある」と回答した者が過半数を超えた項目は「生活に熱意がわかない」(56.2%)、「授業に興味・関心がわかない」(61.8%)、「進級や卒業ができるか心配だ」(53.3%)の3つであった。このほか、「友達のことで悩みがある」(42.6%)、「授業の内容についていっていない」(49.4%)、「やりたいことが見つからない」(46.4%)もその割合が高めであった。また、「他の学部や学科・コースに移りたい」、「他の大学に入り直したい」という項目については、ベネッセ教育研究開発センターが実施した「大学生の学習・生活実態調査」でそれぞれ32.4%、45.7%が「よくある」あるいは「たまにある」と回答していた。

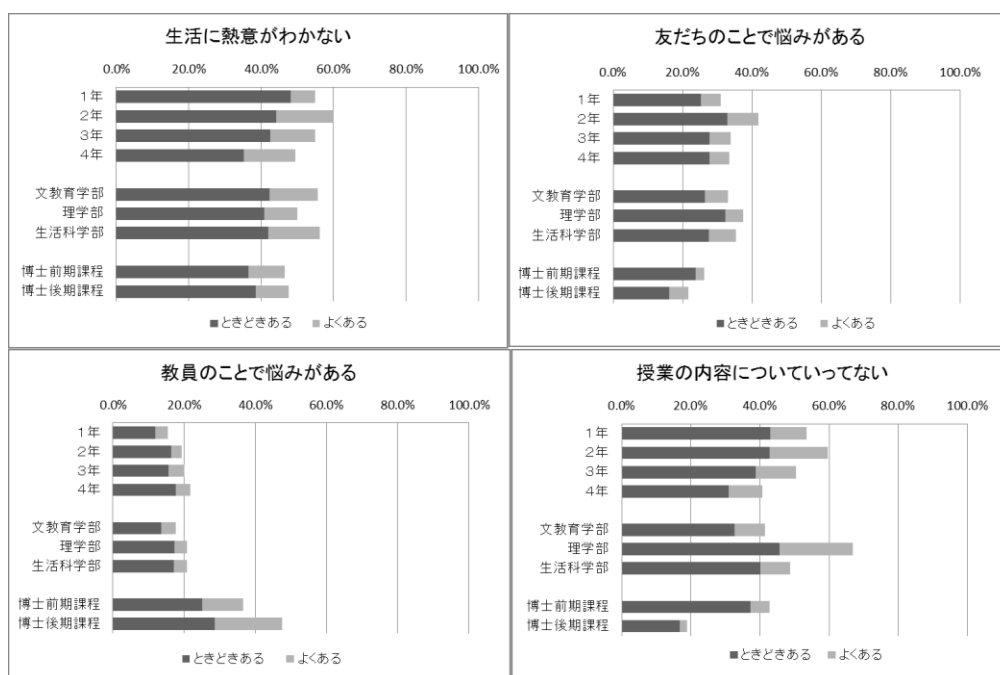
図表4-1は同じ質問項目についてのお茶大生の結果である。「生活に熱意がわかない」学生は学部・大学院ともに5割おり、とくに2年生でその割合が高くなっている。

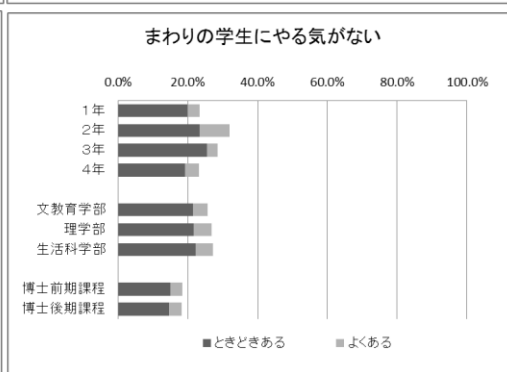
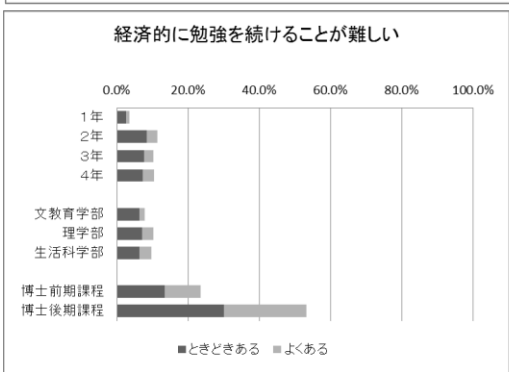
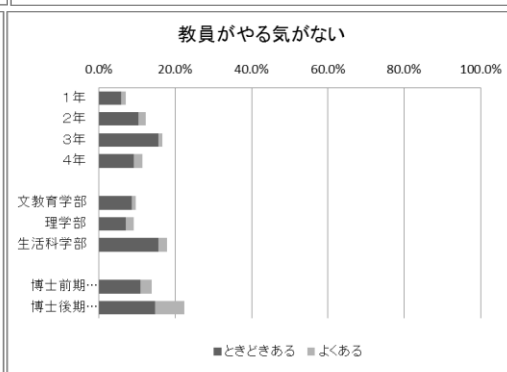
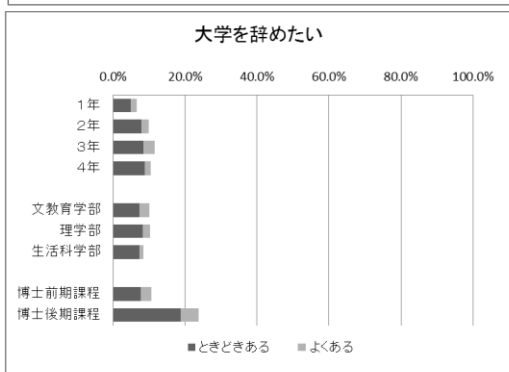
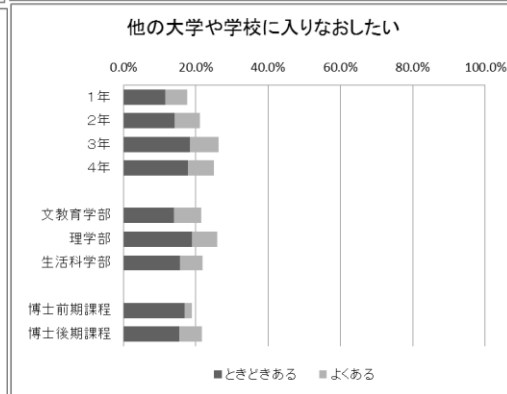
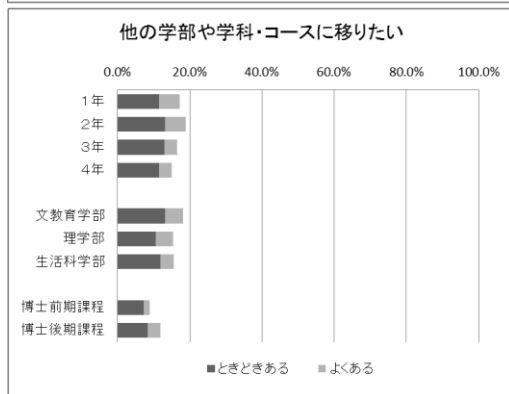
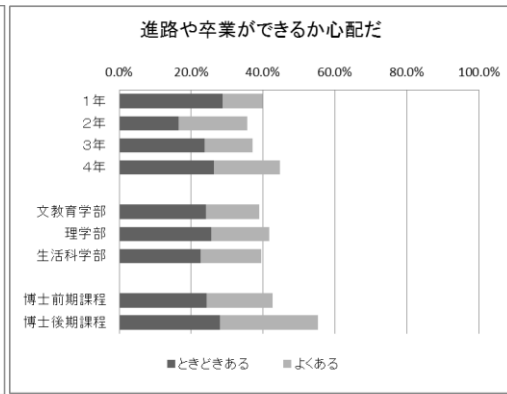
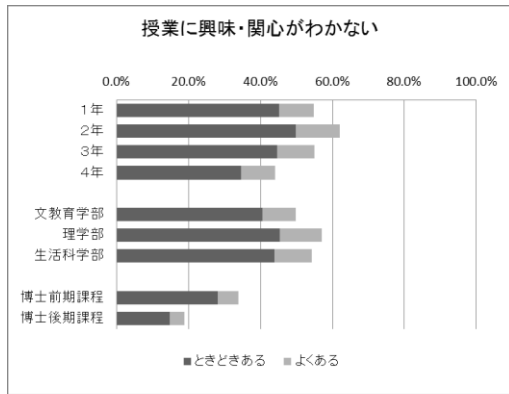
「友達のことで悩みがある」と回答する者は「全国大学生調査」に比べ低い割合であり、学部平均で34.8%である。この項目についても2年生でその割合が若干高くなっている。

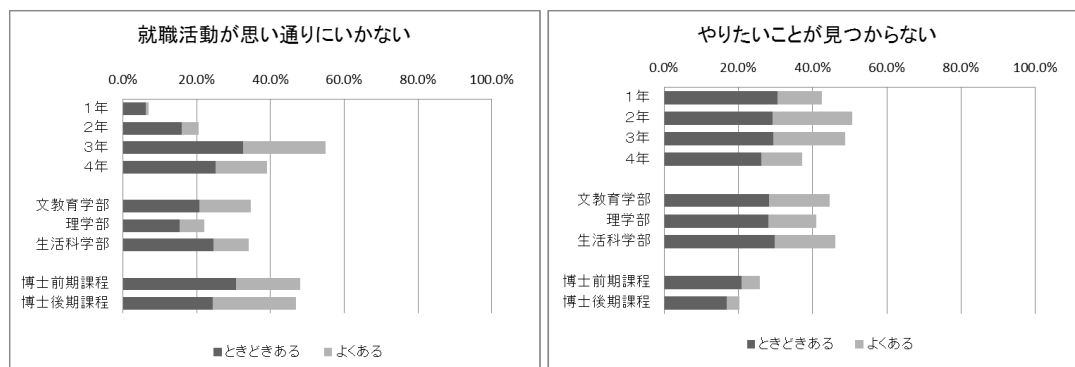
「教員のことで悩みがある」と回答した者はとくに大学院生で多く、博士前期課程で36.5%、博士後期課程で47.6%いた。教員と大学院生の距離が学部生よりも近くなるため、悩みも発生しやすくなると考えられる。

「授業の内容についていっていない」も2年生でその割合が高く、6割近くがそのように考えている。学部別に見ると、理学部が突出してその割合が高い。

図表4-1 学生の悩みや不安







注)「あまりない」、「ほとんどない」、無回答の割合はグラフから省略した。

「授業に興味・関心がわからない」は「全国大学生調査」で6割が「よくある」あるいは「ときどきある」と回答した項目であるが、お茶の水女子大学は平均で53%とその比率は比較的低い。しかし、この項目も2年生で若干高い割合となる。

「進級や卒業ができるか心配だ」については、約4割が「よくある」あるいは「ときどきある」と回答しており、「全国大学生調査」よりも低い割合であった。一方、大学院博士後期課程では55%がそのように考えている。

「他の学部や学科・コースに移りたい」は学部で2割弱、大学院で1割程度いたが、ベネッセ調査と比較するとその割合は低い。

「他の大学や学校に入り直したい」についても、ベネッセ調査では45.7%いたが、お茶の水女子大学の調査では2割にとどまった

「大学を辞めたい」、「教員にやる気がない」については博士後期課程のみで2割を超えた。

「経済的に勉強を続けることが難しい」については、大学院で顕著にその割合が高く、博士前期課程で23.5%、とくに博士後期課程で53.2%と過半数を超えた。

「まわりの学生にやる気がない」は学部平均で26.4%と「全国大学生調査」の39.9%と比べ低い割合であった。

「就職活動が思い通りにいかない」は「全国大学生調査」では24.3%であったが、お茶の水女子大学では学部平均で31.2%、大学院平均で47.6%と高い割合となった。とくに就職活動中の3年生で54.9%がそのように考えていた。

「やりたいことが見つからない」の学部平均は44.1%であり、「全国大学生調査」(46.4%)と同様の結果となった。

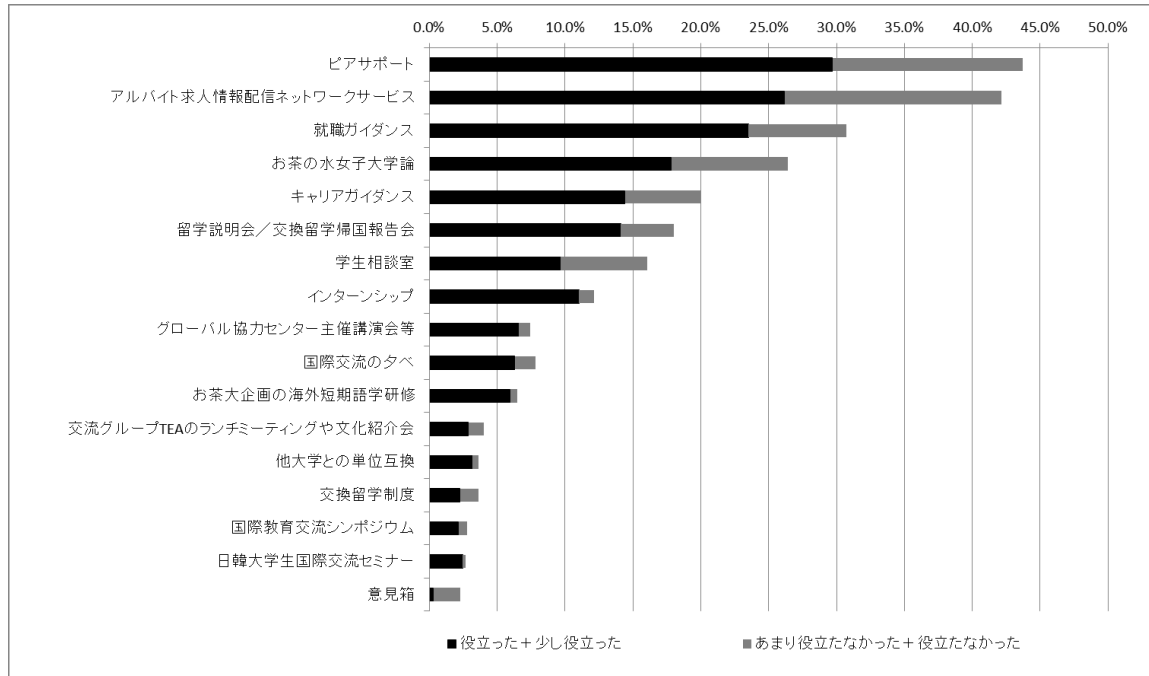
2. 教育支援

お茶の水女子大学が提供しているさまざまな教育支援について、利用したことがあるかどうか、利用したことがあれば役に立ったかどうかを回答してもらった(図表4-2)。このうち、意見箱、日韓大学生国際交流セミナー、国際教育交流シンポジウム、交換留学制度、他大学との単位互換、交流グループTEAのランチミーティングや文化紹介会、国際交流のタベ、グローバル協力センター主催講演会・講義・シンポジウム・5女子大学コンソーシアムについて、利用したことがある者は1割未満であった。利用者は少ないが、意見箱を除き、これらを利用した者のほとんどが「役立った」あるいは「少し役立った」と回答している。

一方、ピアサポート、アルバイト求人情報配信ネットワークサービスの利用者は4割、就職ガイダンスは3割、お茶の水女子大学論は2.5割、キャリアガイダンスは2割、留学説明会/交換留学帰国報告会、学生相談室は1.5割、インターンシップは1割強の利用があった。ピアサポートについては、学部の差が大きく、理学部では9割の学生が利用したことがない一方で、生活学部では6割弱、文教

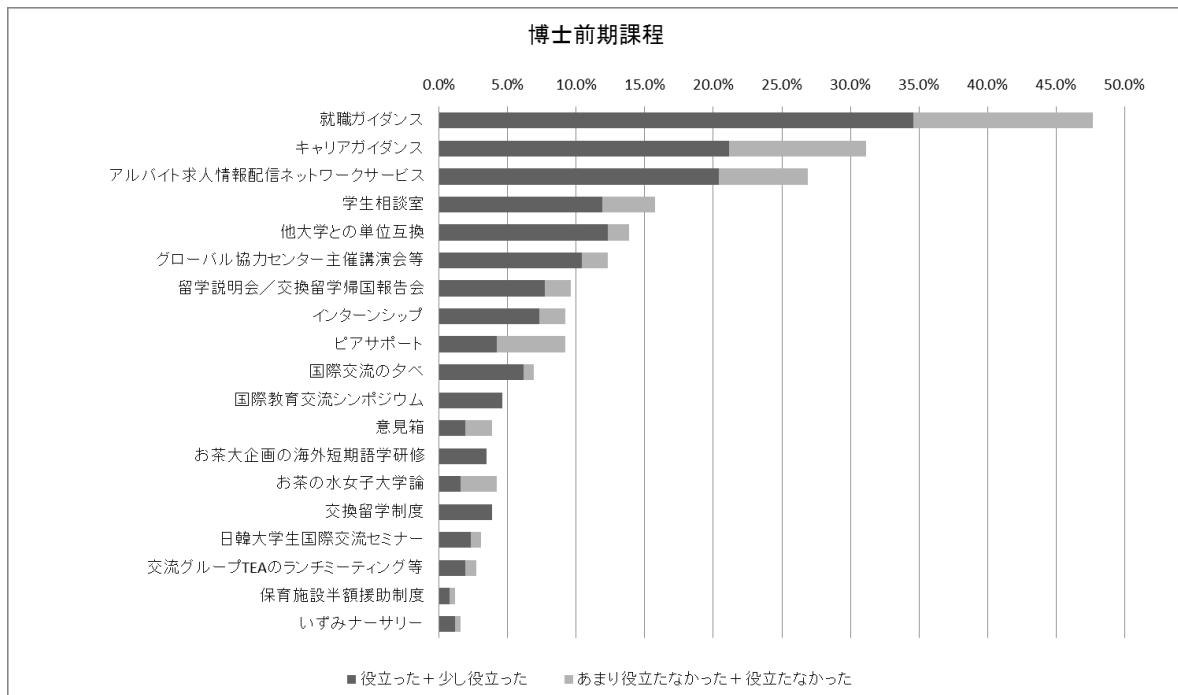
育学部では3割弱の学生が利用したことがないと回答している。ピアサポート、アルバイト求人情報配信ネットワークサービスは利用者のおよそ3分の1が「あまり役立たなかった」あるいは「役立たなかった」と回答している。

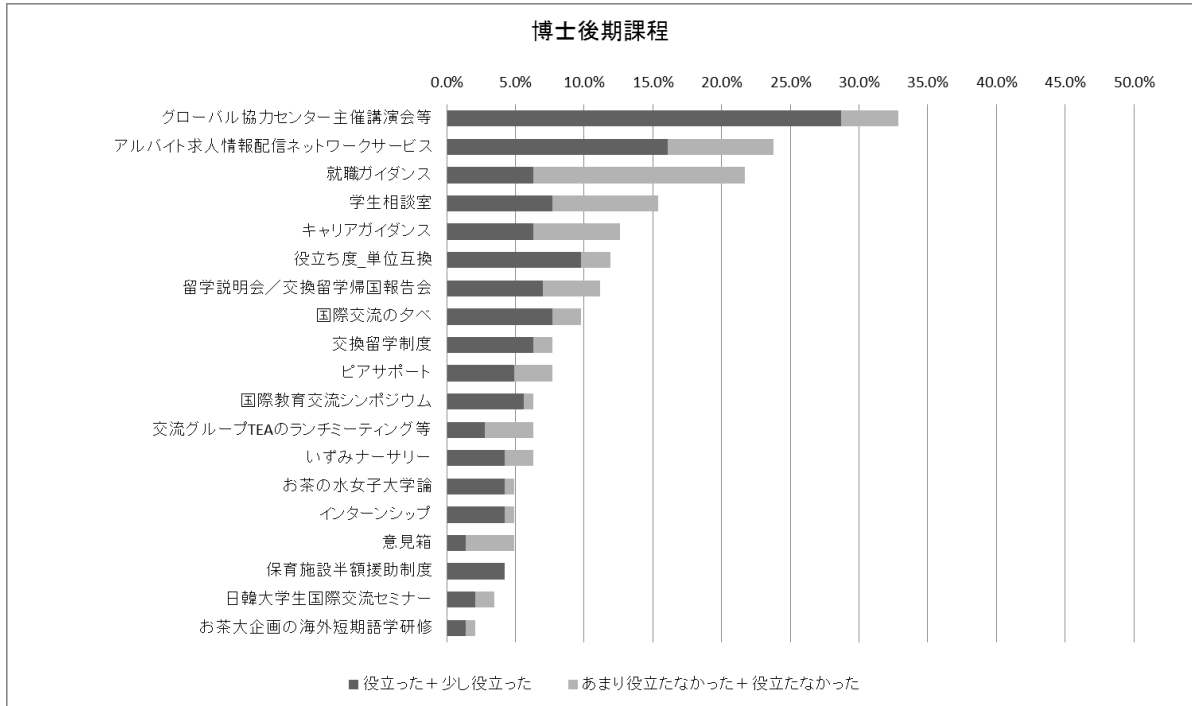
図表 4-2 教育サービスを利用したことがあるか、役立ったか(学部)



注)「利用したことがない」、無回答は省略し、利用したことがある者の比率が多い項目から降順に並べている。

図表 4-3 教育サービスを利用したことがあるか、役立ったか(大学院)



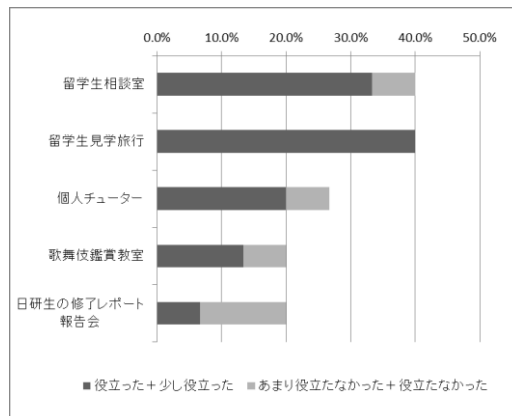


注)「利用したことがない」、無回答は省略し、利用したことがある者の比率が多い項目から降順に並べている。

大学院生については利用しているサービスが学部生とは異なる。まず博士前期課程の学生のうち、47.7%が就職ガイダンス、31.1%がキャリアガイダンス、27.0%がアルバイト求人情報配信ネットワークサービスを利用している。博士後期課程の学生については、グローバル協力センター主催講演会・講義・シンポジウム・5女子大学コンソーシアムに32.9%、アルバイト求人情報配信ネットワークサービスに23.8%、就職ガイダンスに47.7%が利用したことがあると回答した。いずみナーサリーについては、博士前期課程の利用が1.5%であるのに対し、博士後期課程になると6.5%が利用している。

留学生のためのサービスについては、留学生の回答者数が学部全体で15人、大学院博士前期課程で18人、博士後期課程で25人であったため、以下の結果は留学生全体を代表した結果であるとは言えないが、参考のため掲載する。

図表 4-4 留学生のための教育サービスを利用したことがあるか、役立ったか(学部・留学生のみ)

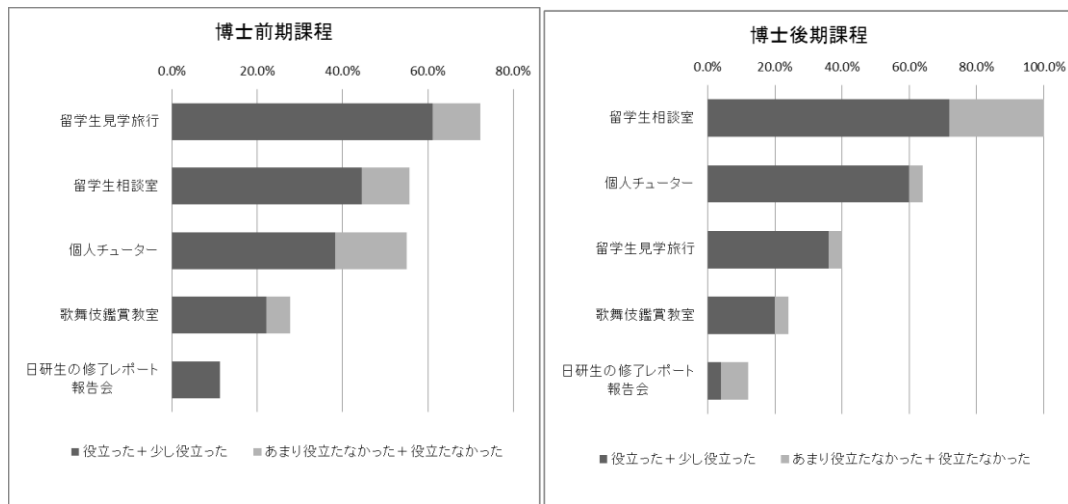


注)N=15人。「利用したことがない」、無回答については省略し、利用したことがある者の比率が多い項目から降順に並べている。

まず学部について、留学生相談室と留学生見学旅行は4割、個人チューターは2.5割、歌舞伎鑑賞会と日研生のレポート報告会は回答者のなかで2割の利用があった。留学生見学旅行については利用者全員が「役立った」あるいは「少し役立った」と回答、留学生相談室、個人チューター、歌舞伎鑑賞会も利用者の過半数が役立ったと感じているようである。

つぎに大学院生であるが、博士前期課程のうち留学生見学旅行に72.3%、留学生相談室と個人チューターに55%という過半数が参加しており、そのうち多くのものが「役立った」あるいは「少し役立った」と回答している。博士後期課程については、回答者の全員が留学生相談室を利用しており7割が「役立った」あるいは「少し役立った」と考えている。個人チューターも6割以上が利用しており、そのほとんどが役立ったと回答している。

図表 4-5 留学生のための教育サービスを利用したことがあるか、役立ったか(大学院・留学生のみ)

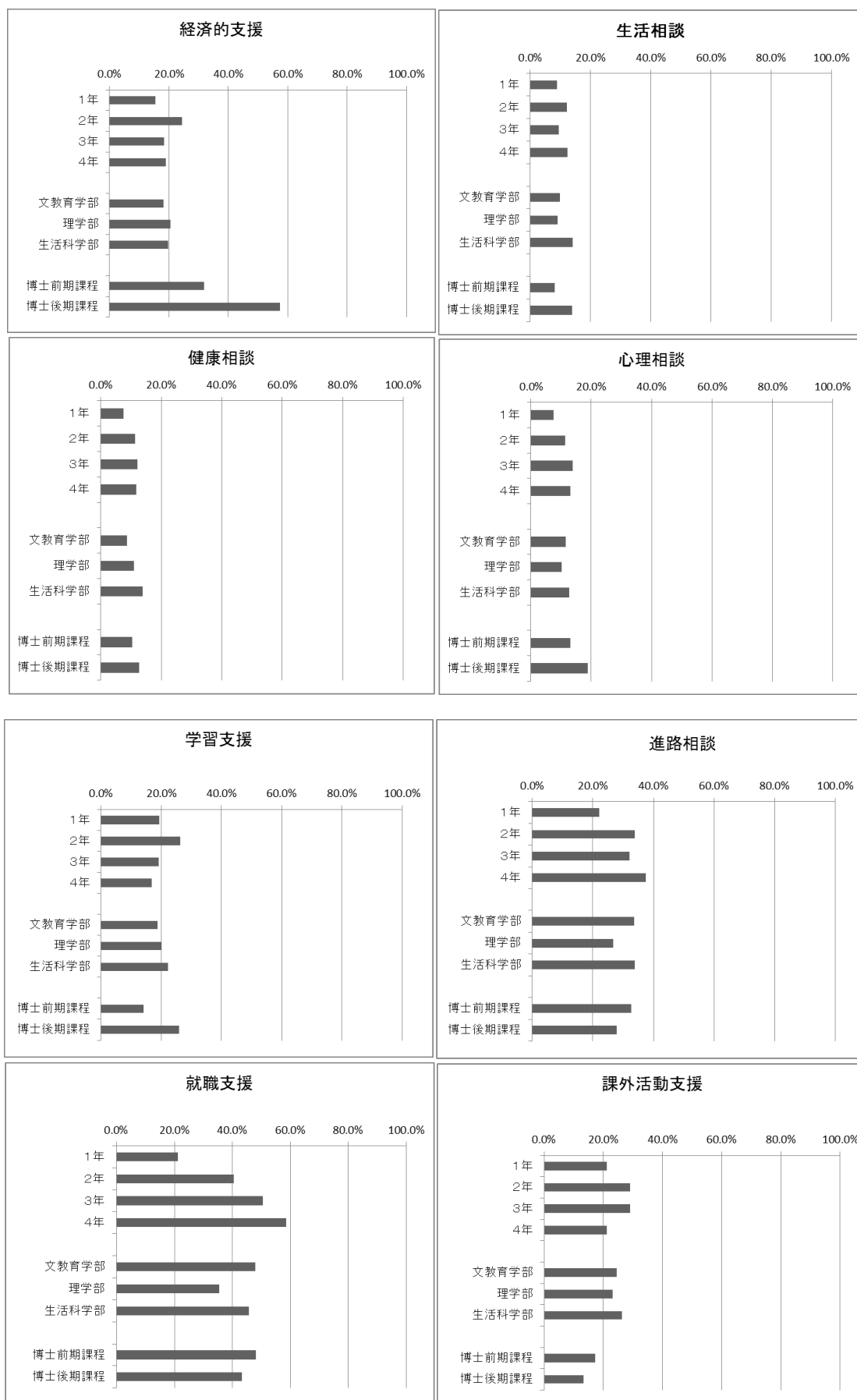


注) 博士前期課程N=18人、博士後期課程N=25人。「利用したことがない」、無回答については省略し、利用したことがある者の比率が多い項目から降順に並べている。

3. 学生支援活動に対する評価

お茶の水女子大学の学生支援活動で足りないものについて選択してもらったところ、とくに就職支援、そして進路相談の比率が高かった。就職支援については学部2～4年生と博士前期課程および博士後期課程の学生の4割が選択していた。このほか、博士後期課程の学生は約6割、博士前期課程の学生は約3割が経済的支援を選択していた。

図表 4-6 本学の学生支援活動で足りないところ(多項選択)



4. ハラスメント対策

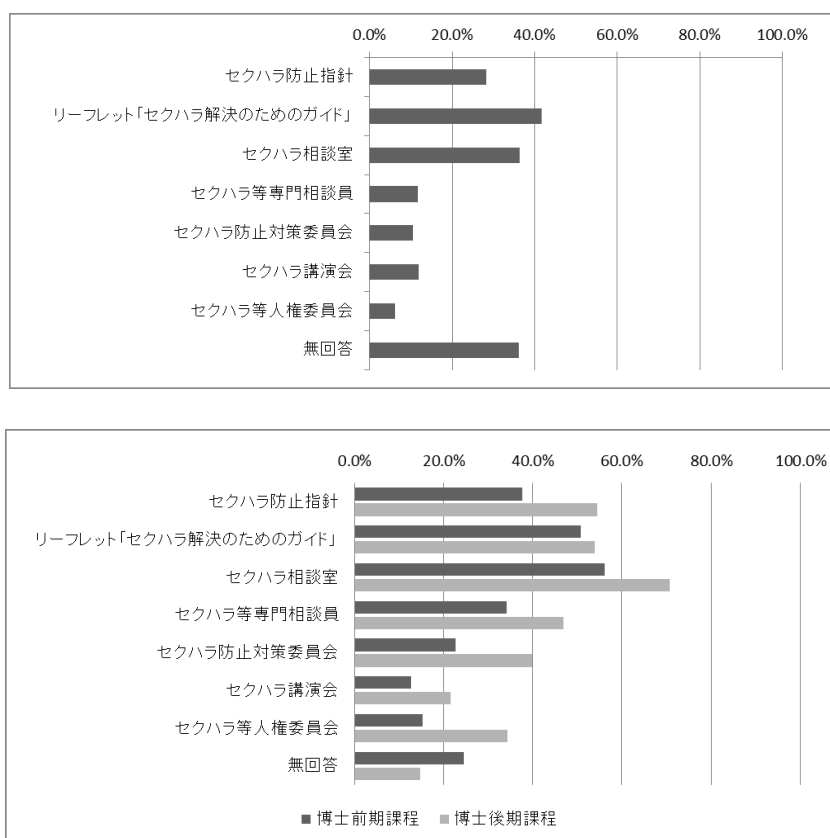
お茶の水女子大学はセクシャル・ハラスメント等のハラスメントに対する対策をいろいろと立てている。しかし、そのような対策の認知度はあまり高いとは言えないようである。

リーフレット「セクシャル・ハラスメント解決のためのガイド」を知っている学部生の割合は 41.6%、セクシュアル・ハラスメント相談室については 36.4%、セクシュアル・ハラスメント防止指針については 28.4%であった。セクシュアル・ハラスメント専門相談員、セクシュアル・ハラスメント防止対策委員会、セクシュアル・ハラスメント講演会、セクシュアル・ハラスメント等人権委員会については 1 割程度が知っているにすぎなかった。

大学院生の認知度はもう少し高く、リーフレット、相談室については博士前期課程・後期課程ともに過半数、防止指針については博士後期課程の学生で過半数が知っていた。このほか、専門相談員、防止対策委員会については博士後期課程の学生のおよそ 4 割が知っている。これに比べると、博士前期課程の学生の認知度は低い。

対策をいくら立てても学生に認知されなければ支援に結びつかない。これらの対策のより一層の周知が求められる。

図表 4-7 セクハラ等ハラスメント対策についての認知度(多項選択)



5. 経済支援

学生の 1 ヶ月の収入はどのくらいだろうか。学部生の平均は 64,157 円、大学院生の平均は 88,601 円であった (図表 4-8)。

図表 4-8 1ヶ月の収入(円)(学部別、学科別)

	N	平均値	中央値	標準偏差
文教育学部	382	62974.2	50000.0	49112.89
理学部	214	61219.6	50000.0	48006.94
生活科学部	236	68735.2	60000.0	51620.16
1年	186	54840.6	50000.0	46504.06
2年	187	72249.7	60000.0	54152.25
3年	190	63010.5	57500.0	44168.00
4年	269	65782.9	50000.0	51101.04
合計	832	64157.0	50000.0	49588.11
博士前期課程	225	72517.4	60000.0	55988.60
博士後期課程	112	120912.1	120000.0	73835.72
合計	337	88601.1	80000.0	66423.31

授業料をどのように支払っているかを見ると、学部と大学院博士前期課程では親・保証人がすべて支払っているケースが多い。2007年に実施された全国大学生調査コンソーシアム／東京大学大学経営・政策研究センター「全国大学生調査」によれば、授業料を両親等が払っている割合の平均が8.5割、奨学金が1.4割、アルバイト・給与が0.4割、その他が0.2割であった。これに比べると、お茶の水女子大学の学生は親・保証人が授業料を払っている割合が比較的高い。

一方、大学院博士後期課程の学生は、親・保証人が支払っているほか、奨学金やアルバイト・給与でもまかなっているケースも多い。

図表 4-9 授業料の払い方(割合)(学部)

		親・保証人から	奨学金	アルバイト・給与	その他			親・保証人から	奨学金	アルバイト・給与	その他
合計	N	863	544	507	466	1年	N	197	125	121	118
	平均値	8.9	1.5	.5	.3		平均値	9.2	1.1	.1	.5
	中央値	10.0	.0	.0	.0		中央値	10.0	.0	.0	.0
	標準偏差	2.75	3.15	1.73	1.66		標準偏差	2.33	2.78	.36	2.21
文教育学部	N	404	243	226	205	2年	N	193	119	110	102
	平均値	8.9	1.7	.4	.2		平均値	8.9	1.6	.4	.3
	中央値	10.0	.0	.0	.0		中央値	10.0	.0	.0	.0
	標準偏差	2.72	3.28	1.49	1.52		標準偏差	2.88	3.14	1.73	1.32
理学部	N	223	141	129	117	3年	N	192	132	119	108
	平均値	8.9	1.7	.4	.2		平均値	8.8	1.8	.7	.4
	中央値	10.0	.0	.0	.0		中央値	10.0	.0	.0	.0
	標準偏差	2.84	3.39	1.51	1.22		標準偏差	2.87	3.43	2.18	1.85
生活科学部	N	236	160	152	144	4年	N	281	168	157	138
	平均値	9.0	1.2	.7	.5		平均値	8.9	1.6	.6	.2
	中央値	10.0	.0	.0	.0		中央値	10.0	.0	.0	.0
	標準偏差	2.72	2.70	2.18	2.11		標準偏差	2.84	3.19	1.95	1.10

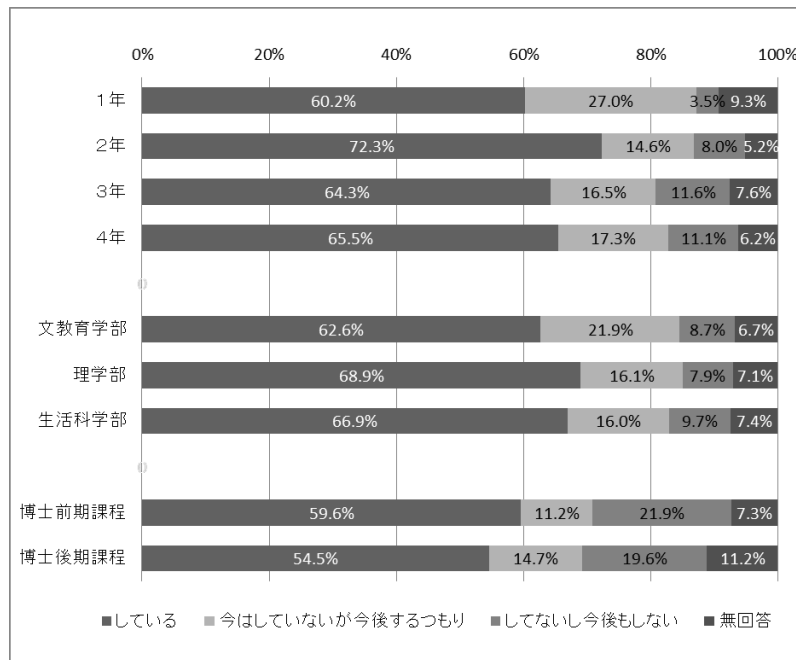
図表 4-10 授業料の払い方(割合)(大学院)

		親・保証人から	奨学金	アルバイト・給与	その他
合計	度数	285	212	223	178
	平均値	7.5	2.8	2.6	1.7
	中央値	10.0	.0	.0	.0
	標準偏差	4.00	3.93	3.90	3.62
博士前期課程	度数	214	145	141	122
	平均値	8.2	2.1	1.4	.9
	中央値	10.0	.0	.0	.0
	標準偏差	3.48	3.61	3.03	2.70
博士後期課程	度数	71	67	82	56
	平均値	5.3	4.2	4.7	3.4
	中央値	5.0	3.0	3.5	.0
	標準偏差	4.62	4.22	4.33	4.68

それでは、お茶の水女子大学の学生はどのくらいアルバイトをしているだろうか。学部生・大学院生のうち平均6割がアルバイトを調査時点でおこなっていた。今後アルバイトをしようと考えている

者を含めると、学部生の8割以上、大学院生の7割がアルバイトに対し何らかの必要性を感じているようである。

図表 4-11 アルバイトの有無



アルバイトを現在している者について、アルバイトの週あたりの平均日数は学部・大学院ともに2.5時間、平均時間は学部で10.9時間、大学院で11.1時間であった。とくに博士後期課程の学生の平均日数が週2.7日、平均時間が週12.6時間と比較的多い。

ベネッセ教育研究開発センターが実施した「大学生の学習・生活実態調査」では週あたりの平均時間が14.3時間であった。これに比べるとお茶の水女子大学の学生のアルバイト時間は比較的少ないようである。

図表 4-12 アルバイト平均日数/週(学部別、学年別)

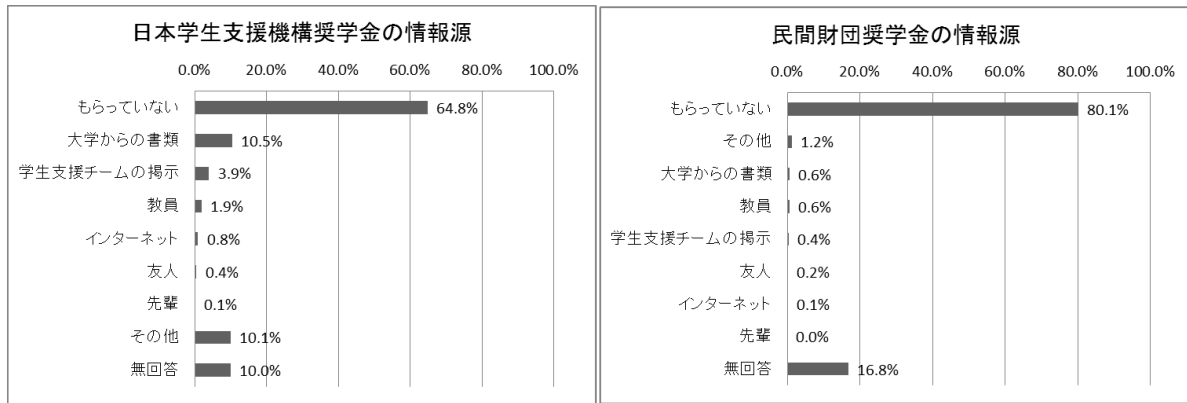
	N	平均値	中央値	標準偏差
文教育学部	281	2.5	2.0	1.15
理学部	172	2.4	2.0	1.12
生活科学部	178	2.5	2.0	1.16
1年	134	2.6	3.0	1.17
2年	152	2.6	2.0	1.16
3年	144	2.3	2.0	1.08
4年	201	2.4	2.0	1.14
合計	631	2.5	2.0	1.14
博士前期課程	150	2.3	2.0	1.21
博士後期課程	77	2.7	2.0	1.45
合計	227	2.5	2.0	1.30

図表 4-13 アルバイト平均時間/週

	N	平均値	中央値	標準偏差
文教育学部	276	11.4	10.0	10.81
理学部	170	9.5	8.0	6.15
生活科学部	178	11.4	10.0	7.68
1年	133	10.2	9.5	6.61
2年	150	11.6	10.0	7.04
3年	145	10.3	9.0	13.31
4年	196	11.2	10.0	7.37
合計	624	10.9	10.0	8.91
博士前期課程	151	10.3	8.0	7.50
博士後期課程	75	12.6	10.0	9.75
合計	226	11.1	8.0	8.36

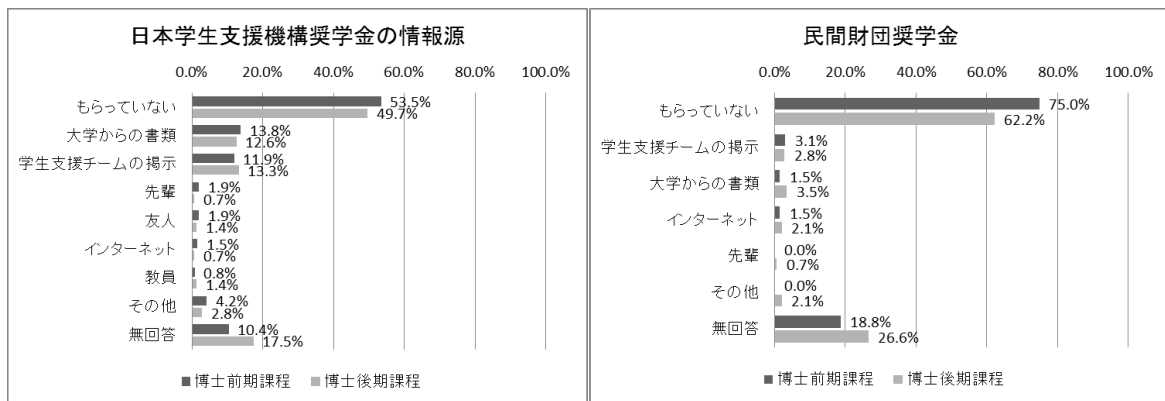
それでは奨学金はどの程度の学生が受給しているだろうか。日本学生支援機構の奨学金を受給している学部生で3割未満、大学院生では半数近くである。奨学金の情報は大学からの書類や学生支援チームの掲示から得る者が多いようである。

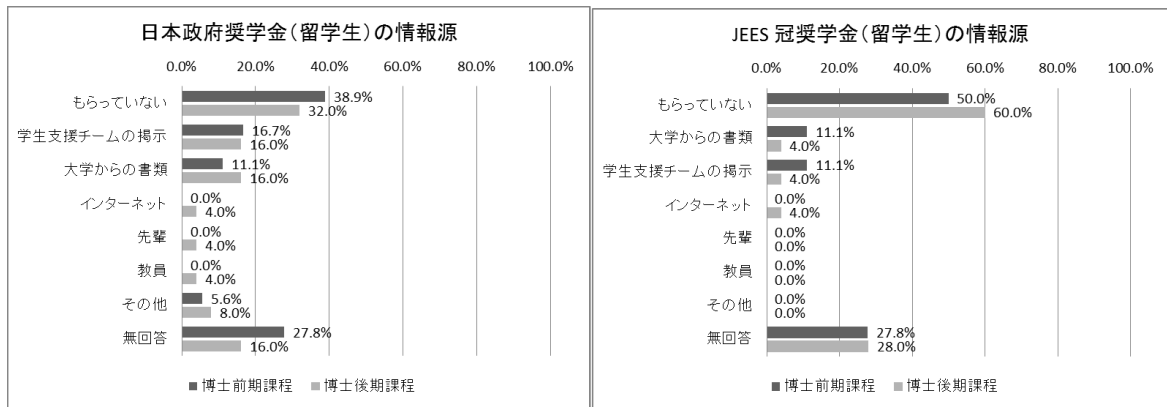
図表 4-14 奨学金別受給状況と奨学金を知った情報源(多項選択)(学部)



注) 留学生向けの奨学金については回答人数が少ないため省略。

図表 4-15 奨学金別受給状況と奨学金を知った情報源(大学院)





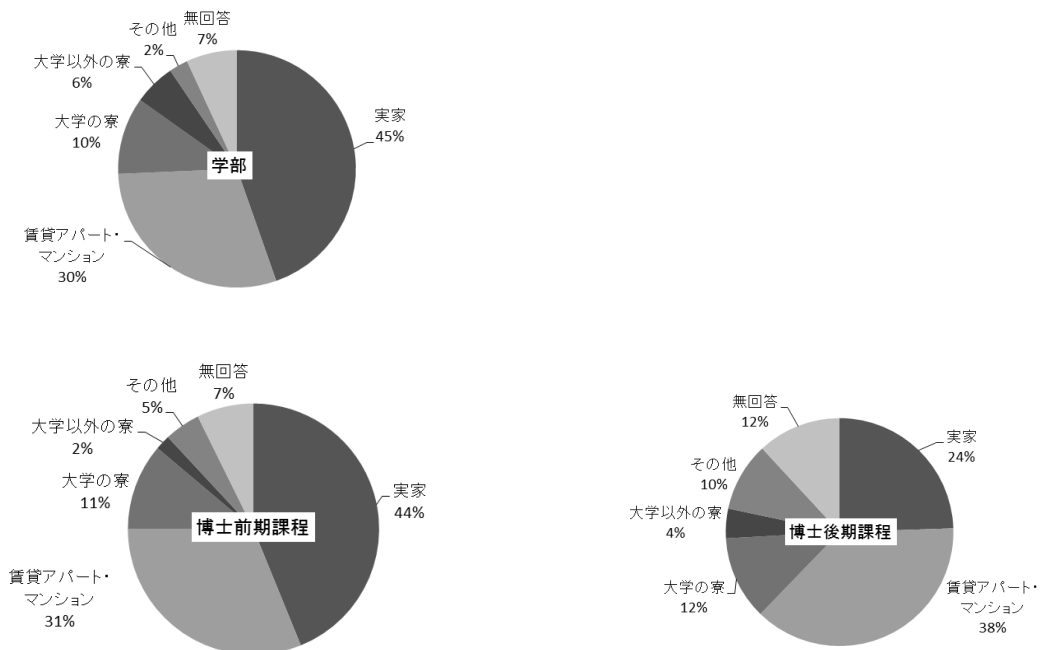
注) 留学生の回答者数は博士前期課程 18 人、博士後期課程 25 人。調査票のミスで大学院生については情報源を多項選択ではなく単項選択で聞いている。

6. 学生の住居と寮

学部生の 45%は実家、30%は賃貸アパート・マンション、10%が大学の寮、6%が大学以外の寮に住んでいる。大学院博士前期課程の学生の住居も学部生とあまり変わらないが、大学以外の寮に住んでいる割合が若干下がる。博士後期課程の学生の住居は異なり、賃貸アパート・マンションに住んでいる割合が最も多く 38%、それに比べ実家に住んでいる者は 24%と学部生・前期課程の学生に比べ少ない。その一方、大学の寮や大学以外の寮に住んでいる割合は学部生・前期課程の学生とあまり変わらない。

2007 年に実施された全国大学生調査コンソーシアム/東京大学大学経営・政策研究センター「全国大学生調査」では自宅に住んでいる学生の割合は平均 51.5%、賃貸アパート・マンションは 40.6%であり、これに比べると、お茶の水女子大学の学生は実家に住んでいる割合が比較的低い。

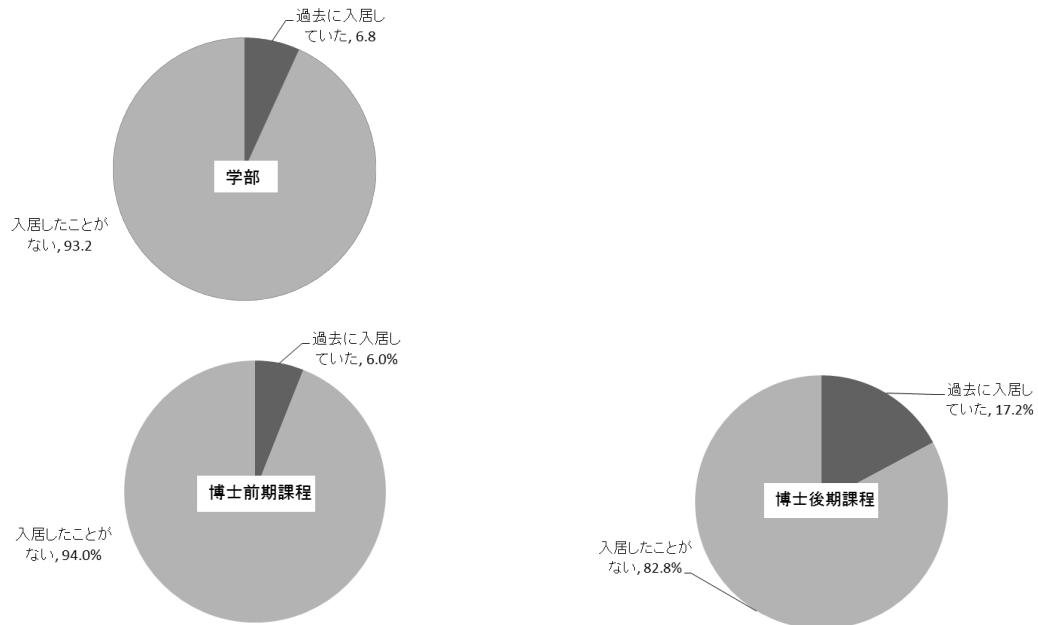
図表 4-16 住居の種類



現在、大学の寮以外に住んでいる者に大学の寮に入寮していたことがあるかどうか、入居希望はあるかどうかを尋ねた。学部生と大学院博士前期課程の学生のうち9割以上が入寮経験がなく、博士後期課程の学生では8割に入寮経験がなかった。

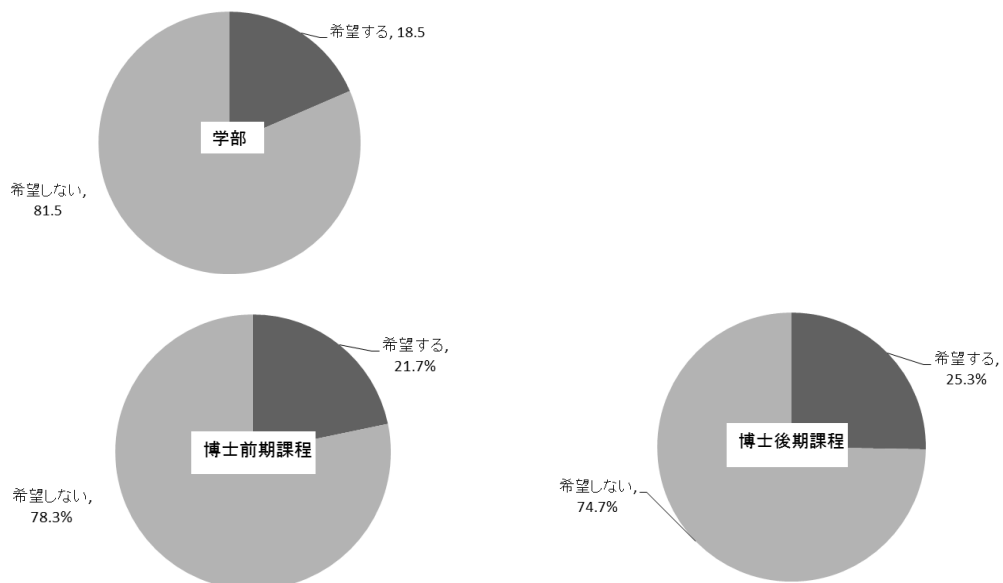
大学の寮への入居希望は学部生で18.5%、博士前期課程の学生で21.7%、博士後期課程の学生で25.3%いた。

図表 4-17 大学の寮に入寮したことがあるか(大学の寮以外に住んでいる人のみ)



注)無回答は除いた。

図表 4-18 大学の寮への入居希望

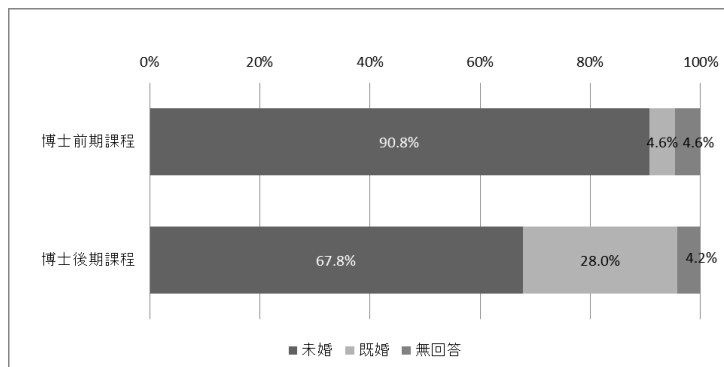


注)無回答は除いた。

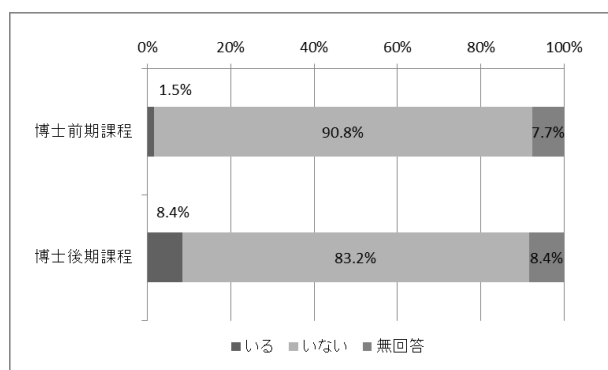
7. 保育支援(大学院生)

大学の保育支援について大学院生のみ尋ねた。博士前期課程の学生の4.6%、博士後期課程の学生の28.0%が既婚、また、保育を必要とする子どものいる割合は博士前期課程で1.5%、博士後期課程で8.4%であった。

図表 4-19 大学院生の未既婚率

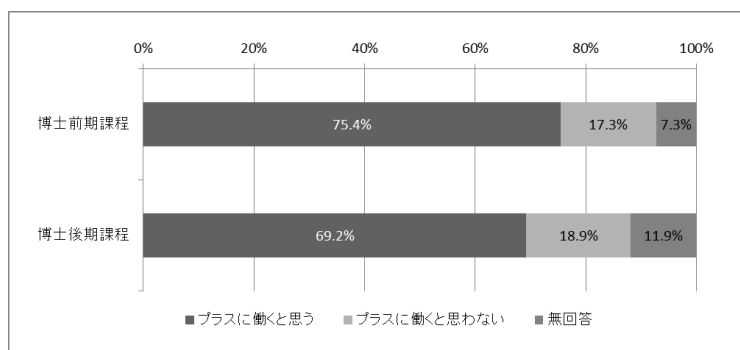


図表 4-20 保育を必要とする子どもの有無



学内の保育施設が大学院博士前期課程や博士後期課程への進学を決める上でプラスにはたらくかを尋ねたところ、博士前期課程の学生の75.4%、博士後期課程の学生の69.2%が「プラスに働くと思う」と回答している。

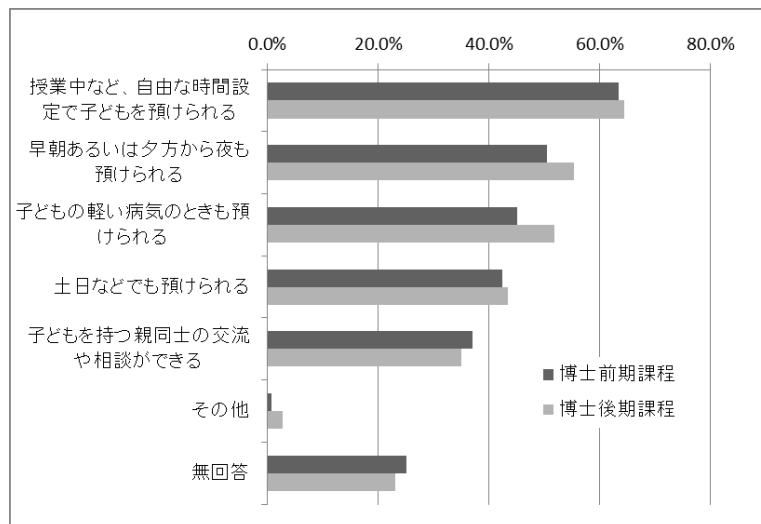
図表 4-21 学内の保育施設は進学を決める上でプラスにはたらくか



学内の保育施設で通常の保育以外にどのようなサービスがあるとよいと思うかを尋ねたところ、「授業中など、自由な時間設定で子どもを預けられる」を6割強、「早朝あるいは夕方から夜も預けられる」、「子どもの軽い病気の時も預けられる」を5割、「土日などでも預けられる」を4割強が選択した。

その他の回答として、保育施設で預かってくれる子どもの年齢をあげてほしい、小学校低学年くらいまでの児童を対象とした学童保育のような施設がほしい、卒業生の子どもも預かってほしい、利用料を下げしてほしい、シンポジウムや学会時に預けられるようにしてほしい、といった要望が寄せられた（具体的には付表6を参照のこと）。

図表 4-22 学内の保育施設でほしいサービス(多項選択)



保育支援以外に、社会で活躍し続けるためには大学からどのようなサポートがあるとよいと思うかを選択してもらったところ、「卒業生のための再就職の紹介斡旋」を6割、「卒業生の再教育のためのシステムの充実」を5割が選択した。その他の意見として、卒業後の保育施設や図書館の利用を可能にしてほしい、卒業生の功績を知らせるシステムやネットワーク・同窓会を充実してほしい、大学院生への学会参加補助や講師等の就職への道を開く仕組みを作してほしいという要望が寄せられた（具体的には付表6を参照のこと）。

図表 4-23 社会で活躍するための大学からのサポート(多項選択)

